

近代日本における「老年学」
——寺澤巖男の「老年学」構想をめぐって——

Gerontology in Modern Japan:
A study on TERASAWA Izuo's ideas on gerontology

本村昌文 MOTOMURA, Masafumi

はじめに

平成27年（2015）10月1日現在、日本の総人口は1億2711万人、そのうち高齢者の人口は3392万人となり、総人口に占める割合、すなわち高齢化率は26.7%となった（1）。超高齢化、多死、人口減少という言葉が飛び交う現代日本において、「老年学」という学問分野の重要性が高まっている。

これまで日本における「老年学」という学問分野の研究は、日本老年学会が日本老年医学会・日本老年社会科学会・日本基礎老化学会・日本老年歯科医学会・日本老年精神医学会・日本ケアマネジメント学会・日本老年看護学会という学会から構成されていることからわかるように、医学・歯学・看護学・生物学などの自然科学系の分野と経済学・社会学・福祉学・心理学などの社会科学系の分野とがリードしてきたといえる。たとえば、『新老年学』初版（東京大学出版会、1992年）の序文に、「老年学とは、老年者の疾患等を研究対象とする老年医学、老年者の社会的問題を研究対象とする老年社会学、および老化の機序等を研究対象とする基礎老化学を三つの柱とする総合人間学ともいうべき学問である」と「老年医学」・「老年社会学」・「基礎老化学」の3つを「老年学」の柱とすると述べられていることも（2）、上述のような従来の研究状況を象徴しているといえよう。

しかし、近年、これまでの「老年学」研究を再考し、新たな試みを促す動向が生じている。2014年度から新設された科研費・特設分野研究「ネオ・ジェロントロジー」もその一つと位置づけられるだろう。この特設分野研究「ネオ・ジェロントロジー」の公募要領には、「多様な高齢者像の視点に立った「ネオ・ジェロントロジー」ともいうべき、新しい研究が、様々な分野で始まっている動向を捉え、本分野を設定した」と述べられており、さらに以下のようなテーマ設定が具体例として挙げられている。

そもそも老いとは何なのかを思想的に問うことも必要である。たとえば、〈老い〉の豊かさや価値についての歴史的・思想的・比較文化的分析、蓄積された経験が大きな資産となる暗黙知の伝承の民俗学的・文化人類学的考察、海外の高齢化に関する国際比較的分析、平均値ではとらえることのできない〈老い〉の個体差に関する心理学的究明、寿命の延長にともなう男女の

ライフコースの変化や年齢役割の変化、さらには人間の終末としての死に対する態度に関する死生学的研究、今後の社会政策が前提とすべき高齢社会の構造に関する研究、高齢社会の新たな段階における倫理に関する研究など、また、医学や工学分野においても、多様な高齢者像の視点のもとで、これまでにない高齢の構造の解明を企図する他分野との連携に立った研究など、あらゆる分野からの研究課題を募集する。(3)

ここに挙げられたテーマ設定から、これからの〈老年学〉研究において、「歴史的・思想的・比較的文化的分析」、「民俗学的・文化人類学的考察」、「高齢社会の新たな段階における倫理に関する研究」など人文学研究からのアプローチが期待されていることがわかる。すなわち、医学・看護学・生物学などの自然科学、経済学・社会学・法学などの社会科学に加え、人文学の分野からの研究の必要性が示されているのである(4)。

以上のような傾向は、科研費・特設分野研究「ネオ・ジェロントロジー」が設定される以前にもみられる。たとえば、2007年に刊行された柴田博・長田久雄・杉澤秀博編『老年学要論－老いを理解する』では、ロバート・カステンバウムの老年学の定義－①加齢変化の科学的研究、②中高年の抱える問題についての科学的研究、③人文学(humanities)の立場からの研究(歴史、哲学、文学など)、④以上の成果を成人や高齢者に役立つ意識に応用すること－をふまえて、「③の人文学の研究は、わが国の老年学の研究でもっとも遅れている。……人文学を排除することは人類の文化の半分を排除することになる」と述べられており(5)、日本における「老年学」研究において、人文学の分野からの研究の立ち遅れが指摘されている。

しかし、これまで「老年学」研究と関わりのある「老年」や「老い」をめぐって、人文学の分野からなされる研究が皆無であったというわけではない(6)。人文学研究においても、「老年」や「老い」、またそれと密接に関わるさまざまな研究が積み重ねられてきた。むしろ問題なのは、人文学の分野からの研究成果が従来の「老年学」研究に共有される機会がほとんどなかったというところにあるのではないだろうか。そうであるならば、今後、人文学研究の分野からの研究を積み重ねていくとともに、その成果を共有しうる新たな〈老年学〉研究の基盤を整備することが必要なのではなかろうか。

人文学研究からの成果が共有されうる新たな〈老年学〉を構想するうえで、日本におけるこれまでの「老年学」研究について振り返り、なぜ人文学の分野からの研究が遅れていると認識されるに至ったのか、またなぜ人文学の分野からの研究成果が共有されてこなかったのかについて考察することが必要であろう。このような考察の一環として、本稿は、日本において、「老年学」という語が使用され、その具体的な内容が構想されたのは、いつ、誰によるものなのかということを検討する。こうした日本における「老年学」の初発を探訪することを通して、「老年学」という学問のあり方を捉え直す一助としたい。

1、日本における「老年学」研究の草創期

日本における「老年学」研究のはじまりについて、老年心理学の草分け的存在であり、日本老年学会の設立にも関わり、「老年学」研究の発展に寄与したと評価される橘覚勝（明治33年・1900年～昭和53年・1978年）は（7）、以下のように述べている。

ひるがえってわが国の研究動向について考察することにしよう。医学的研究はともかくとして〔といっても筆者が研究をはじめた大正末期頃は、入澤達吉氏の「老年病学」（大正10年刊）が1冊あったにすぎなかった。他に医学関係以外に穂積陳重氏の「隠居論」（大正4年刊）があった〕、松本亦太郎博士は心理学の立場から、すでに大正初期の頃から老年期研究の必須なことに着眼し、みずから研究をすすめるとともに後進にその研究を懲憑した。氏の「精神的動作」（1914、大正3年）やその後の「知能心理学」（1925、大正14年）には同博士の示唆的な研究や論説が掲載された。とくに後者の「知能心理学」のなかに収録された第11章「高年の精神的活動」、第12章「人間の生涯と生命の危機」は大いに示唆に富むものであった。とくにその論文中に“衰頽期における精神的機能が暦年齢にしたがい変化する状態は従来余り研究されていない。私は17、8年前に老人研究という学科のおこる必要性を説いたことがあったが、多数の老人を実験的研究の対象とすることが困難であるため、はかばかしく研究をすすめることができないで経過した……”と説いているが、同博士にはすでに老年学の生誕を予見し、希望していたことがよく判るのである。（8）

橘は自身が老年に関する研究をはじめた頃を回顧し、老年研究のはじまりとして、松本亦太郎（慶応元年・1865～昭和18年・1943）が大正年間に公刊した『精神的動作』（六合館、1914年）、『智能心理学』（改造社、1925年）に注目し、松本が大正初期の頃に老年に関する研究の必要性を自覚し、またその学問の必要性を説いていたと述べている。また、引用中の傍線部からわかるように、大正年間における老年学に関連する研究として、入澤達吉・安藤重治郎・村松平次郎『老人病学』（南江堂書店、大正元年初版、1912）、穂積陳重『隠居論』（大正4年刊、1915、明治24年・1891初版）を紹介している。

ここで、橘が紹介する入澤達吉・安藤重治郎・村松平次郎『老人病学』、穂積陳重『隠居論』、松本亦太郎の『智能心理学』について言及しておきたい。まず『老人病学』について検討したい。この書の著作者の一人である入澤達吉（元治2年・1865～昭和13年・1938）は、東京帝国大学医科大学教授、宮内省の侍医などをつとめ、内科学の発展に寄与した人物である。当時の内科学の第一人者と考えられる入澤らの手になる『老人病学』の初版の序文には、以下のように述べられている。

題シテ『老人病学』ト称スルモ、老人内科ヲ意味ス。……小児科ガ独立シテ一科ヲナシ、小児病学ノ名ノ下ニ幾多ノ著書典籍ノ存スル以上、老人病ニ関スル一切ヲ網羅シ、『老人病学』ト命名ス。何ノ不可カ之アラン。(9)

この序文によれば、「小児科」が独立して一つの診療科を形成し、「小児病学」という分類によって数多くの書籍が存するのと同様に、「老人」に関わる病のすべてを網羅し、独立した内容をもつ本書を『老人病学』と命名するということが述べられている。

さらに、大正10年に刊行された再版本の序では、入澤の以下のような文が付加されている。

予往年独逸留学中、仏国ナンシー大学を参観せるとき、老人科の特設せられたるを見たり。今日に至るも尚一科として、独立し、教授Etienne之を擔任し居れり。是れ独塊諸国に於ては、絶えて無き所なり。而して本邦に於ては、未だ老人病に関する著書すら、之を見ざるを以て、安藤、村松両君と相謀りて、老人病学二巻を著はし、之を世に問へり。(10)

入澤はドイツへ留学(明治23年・1890～明治27年・1894)した際に、フランスのナンシー大学を訪問し、そこで「老人科」が独立して設置されていることを目の当たりにして、日本においてもその必要性を感じ、『老人病学』を著したと述べている。

以上のように、本書は当時の日本においては独立した分野として確立されていなかった老人固有の病を扱う研究書としてまとめられたものである。その意味では、医学の分野から「老年」「老い」にアプローチする営みの初発と捉えることは可能である。しかし、本書のなかでは、「老年学」という用語は使用されておらず、あくまで医学の枠組みにとどまる内容であり、「老年学」研究の全体像を示すことを意図したものとは言い難い。

次に穂積陳重『隠居論』に目を向けてみたい。穂積陳重(安政2年・1855～大正15年・1926)は、東京大学法学部教授をつとめ、民法典の起草にあたり家制度の立法化に尽力した人物である。穂積の『隠居論』は明治24年(1891)に哲学書院から刊行されたものと、大正4年(1915)に改訂増補し有斐閣書房から刊行されたものとの二種類のテキストがある。

明治24年版の緒言には、以下のように記されている。

本邦隠居の制たるや、其来る尚し。武門政権を執りてより、其制倍々盛んに行はれ、上下一般之に由る。維新以還、文物制度、驟かに其面目を改め、古例舊慣の廃絶に帰せんとするもの頗る多し。就中隠居の制の如きは著しき変化を現はし、今や殆んど其舊態を存せざるに至る、唯た其れ然り。今に迨て隠居制法の輯録を図らされば、陳編往々散佚し、後ちに至り、断簡零冊

に依りて、僅に其豹斑を徴するの悔あるに至らん。是れ著者か浅識寡聞を以て取て本著に従事せし所以なり。(11)

この緒言をもとにすると、明治維新後、さまざまな学問や制度が急激に改められていく状況が生まれ、そうした状況は日本で長く行われてきた隠居制にも波及し、その制度の古来のあり方がほとんどわからないようになってしまったことがわかる。さらに、こうした事態を憂えて、隠居制に関わる資料蒐集を行おうという意図から本書が作成されたことが述べられている。なお、大正4年版の自序では、人間の人生を「学生期」「家長期」「退隠期」とにわけ、「老老退隠の習俗、法制」の存在が古今東西に通じる普遍的現象であることに言及しつつ、明治24年版では精査しきれなかった部分や人類学・社会学などの知見を加味して改訂増補するという趣旨が述べられている(12)。

穂積の『隠居論』は、日本の慣習として行われてきた隠居制が、明治維新後、急速に失われていく状況と向き合い、隠居制の全体像を把握できるように資料蒐集を行い、検討を加えたものである。穂積自身が述べているように、隠居制は「老老退隠の習俗、法制」であり、その点では「老年学」研究に通ずる部分があるということができよう。しかし、本書は法制の立場からのアプローチという色合いが強く、「老年学」研究という枠組みを意識した研究と位置づけることは難しい。

それでは、次に松本亦太郎の2つの著作、とくに『智能心理学』について検討することにした。松本亦太郎は帝国大学文科大学で心理学を学び、卒業後は同大学の講師をつとめ、明治39年(1906)に京都帝国大学が設置されるに伴い、同大学へ着任し、大正元年(1912)に東京帝国大学の心理学講座の初代教授である元良勇治郎の逝去に伴い、東京帝国大学へ着任した(13)。よって、『智能心理学』が刊行された大正14年には、松本は東京帝国大学で心理学の研究・教育に従事していたことになる。なお、橋が東京帝国大学を卒業したのは大正12年(1923)のことである。

『智能心理学』という書は、「人間活動の中核たる智的機能を細緻精嚴に観察検討し、進んで実生活に此智能をいかに活用すべきかを示標す」と宣伝されているように(14)、人間の知能に関する観察と実生活への応用を盛りこんだものであった。先に引用した橋の資料のなかにみられるように、『智能心理学』第11章「高年の精神的活動」には、以下のように述べられている。

精神活動には生長、成熟、衰頹の三時期がある。成熟期に於ては、知識経験を増大する点に於て年功は認められるが、精神活動が年齢の進むと共に向上するとは謂はれない。年齢の差が精神活動に対し重大なる影響を及ぼすのは生長期と衰頹期とに対してである。最近の心理学では成熟期の個々人の精神活動を取扱ふに、通例は年齢を度外にして、精神活動の優劣の差を検査し、之を七、八段階に別ち、人々を品評することにしてゐる。……衰頹期に於ける精神的機能が暦年齢に従ひ変化する状態は従来余り研究されてゐない。私は十七八年前に老人研究なる学科の起る必要を説いたことがあつたが、多数の老人を実験的研究の対象とする事が困難なるが

ため、抄々敷研究を進む事が出来ないで経過した。(15)

傍線部の箇所が、先に引用した橘の資料にみられるものである。若干の表記の相違がある以外は、橘はほぼ忠実にこの箇所を引用している。「衰頽期」と位置づけられる老年における心理の研究の立ち遅れを指摘し、「老人研究」という学問分野の必要性を主張している点で、橘が指摘するように松本の着想は「老年学」研究の端緒を切り開く素地を有していたということもできるだろう。なお、『智能心理学』は大正14年(1925)刊行であり、その時点から「十七八年前」とは、明治40年(1907)前後を指すと考えられる。松本は明治39年(1906)に京都帝国大学へ着任していることを考えると、東京帝国大学から京都帝国大学へ異動し、京都帝国大学において心理学講座を創設していくなかで「老人研究なる学科の起る必要性」を主張していた可能性が高いが、現時点ではいかなる構想であったのかは不明である。

松本の「老人研究なる学科」の全体構想を知ることは現時点では困難であるが、『智能心理学』第11章「高年の精神的活動」の構成は、以下のようになっている(16)。

- 第一節 老人の心理的考察
- 第二節 意志動作の消長
- 第三節 精神的活動の停止年齢
- 第四節 日本の学者の寿命
- 第五節 寿命の分配
- 第六節 八十歳以上の名家
- 第七節 一般老年者の死の分配
- 第八節 日本に於ける九十歳及百歳以上の高齢者
- 第九節 若い女の定めたる老人期
- 第十節 老人に対する価値観

以上の章構成をみると、第一節から第三節は老人の心理、意識と年齢との関連に関する見解(17)、第四節から第八節は歴史的な資料や同時代の統計資料にもとづいた寿命に関する考察(18)、第九節は女性の老人観をもとに、教養の浅深と老人観の相関関係についての分析(19)、第十節では「民族の発達、文化の発達の上から老人を如何に観たかと云ふ問題」を扱うことの必要性を説き、また「個人主義、家族主義、敦れが重をなすか、機械観、精神観の敦れが主になるか、或は歴史国であるか新開国であるか、社会が切迫してゐるか、余裕があるか、人道的情操が発達してゐるか、ゐないか等の種々なる状況に影響され老人に対する価値観が相異なる」と、社会的な状況や価値観によって老人の捉え方が相異なることを述べており、老年期の心理状態ということにとどまらず、寿命の

考察、民族や文化の比較考察など幅広い観点が提示されている (20)。こうした点をふまえると、松本の「老人研究なる学科」の全体構想には、少なくとも老年期の心理、寿命の分析、民族と文化との相関関係の考察が含まれていたと推測できるだろう。

このようにみえてくると、松本の主張は、先にみた入澤達吉らの医学を中心としたアプローチ、穂積陳重の法制を中心としたアプローチとは異なり、心理学を中心としつつ寿命の分析と比較民族・比較文化的観点を備えたアプローチと位置づけることができるだろう。ただし、比較民族・比較文化的視点を述べた第十章は展望的な内容となっており、具体的な考察がなされているわけなく、「老人研究」の全体的な構想が自覚的に述べられているわけではない。また、松本は先の資料にみられるように「老人研究」と述べており、「老年学」という用語を用いて説明しているわけではないことに注意したい。

以上の検討より、入澤達吉・安藤重治郎・村松平次郎『老人病学』、穂積陳重『隠居論』、松本亦太郎の『智能心理学』は、それぞれ医学、法制、心理学を中心として寿命や比較民族・比較文化の視点を加味した立場から老年について研究した言説ということはできる。しかし、自らの研究を「老年学」という言葉で規定し、またその学問の全体像を示すという意識は、いずれの著作にもみられない。

さて、橋が入澤達吉・安藤重治郎・村松平次郎『老人病学』、穂積陳重『隠居論』、松本亦太郎の『智能心理学』に言及した先に引用した資料に戻りたい。先の引用資料の記述に続いて、橋は浴風園（現在の養護老人ホーム浴風園〈東京都杉並区〉）で研究を開始し、『浴風園調査研究紀要』の刊行、またそこに掲載された研究の紹介を行い、戦前における研究を振り返った後に、「老年研究そして老年学の提唱のあたらしい幹線は、戦後になってようやく開通したのである。おもうにわが国においても老人福祉の問題が社会的に大きくクローズアップされるにいたったからである」といい (21)、さらに以下のように述べている。

昭和28年（1953年）緒方知三郎博士は老年病の予防と治療に関して学術奨励金を獲得されると同時に、同学同好の士によびかけて老人病研究会を設立し、その事務所ならびに研究室を東京神田の同和病院におき、“人間の寿命と健康とを保持し、老人の多年にわたる体験によって獲得されたる円熟した人間味と練達された技倆とを活用して、人類の福祉増進に資する目的にしたがい、老人性病変の発生についての理論と実際の研究の進展によって、その予防と治療の途を確立し、もって健康の増進と確保につとめ、ひろく社会福祉に寄与しよう”との趣旨をもって、とくに唾液腺ホルモン（parotin）の研究と実験に挺身されようとした。実のところ、この頃によろやくわが国に‘gerontology’という言葉がとねえだされ、筆者はいち早く「老人学」と訳した記憶がある。(22)

ここでは、昭和28年（1953）に緒方知三郎（明治16年・1883～昭和48年・1973、病理学者）が老年病に注目し、研究資金を獲得し研究会を立ち上げたことについて述べ、ちょうどこの時期に“gerontology”という言葉が日本のなかで使用されはじめ、「老人学」と訳した記憶があると指摘されている。この記述によれば、橘は「老年学」研究の本格的な始動を、戦後、とくに昭和28年前後にみているといえる。橘が指摘するように、1950年前後から「老い」「老年」への注目が次第に高まっていき、昭和31年（1956）12月には第1回ジェロントロジー学会が開催されている（23）。

以上、日本における「老年学」研究の展開について、橘の見解は、戦前期においては入澤達吉・安藤重治郎・村松平次郎『老人病学』、穂積陳重『隠居論』、松本亦太郎の『智能心理学』の3つの書物に注目し、それを「老年学」研究につながる先駆的な研究と位置づけ、戦後の1950年前後に「老年学」研究が本格的に始動し、この頃から現在では老年学と訳される「ジェロントロジー」という言葉が使用されはじめるようになったと捉えていることがわかる。

それでは、日本において「老年学」という用語を使い、その学問の全体像を示す営みは、1950年前後をまたねばなかったのであろうか。次節では、この点について検討をしていくこととしたい。

2、寺澤巖男の「老年学」構想

「老年学」という語を用い、その学問の全体的な構想を示したものとして、本稿で注目したいのは、寺澤巖男（明治13年・1880～昭和45年・1970）という人物の「老年学」と題された論考である。この論考は、大正10年（1921）6月刊行『太陽』（27巻8号、博文館創業第三十四^{（ママ）}週年記念増刊）「不老長生之研究」という特集に掲載されたものである。寺澤の論考の検討に入る前に、彼の略歴について簡単に紹介しておきたい。

寺澤巖男は、明治40年（1907年）に東京師範学校を卒業後、京都帝国大学へ入学し、明治44年に京都帝国大学文科大学哲学科を卒業した。哲学科では松本亦太郎に師事し、心理学を研究している。その後、九州帝国大学医科大学へ入学し、大正4年に同大学医科大学を卒業、翌5年に九州帝国大学医科大学副手、翌6年に助手、上述した「老年学」という小論が『太陽』に掲載された大正10年には、東京高等師範学校教授となっている。寺澤は京都帝国大学文科大学で心理学を学び、九州帝国大学医科大学で医学を学んでおり、心理学と医学とに通暁した人物である。また、昭和6年（1931）には東京文科大学教授となり、そこでは体育学を研究・教育している（24）。

以上のように、多方面に研究を展開している寺澤であるが、「老年学」研究においても一つ注目しておきたいことは、前節で取り上げた橘覚勝が以下のように述べている点である。

たしか昭和3年と記憶しているが、東京近郊（現在は杉並区上高井戸3丁目）の浴風園において研究に着手したとき、老人研究に興味をもたれていた寺澤巖男氏の門を叩いて懇篤な指導をうけたり、共同研究を熱心に企画したりしたこともあった。(25)

橘は浴風園で老年研究をスタートさせはじめたときに指導を受け、また共同研究を企画した人物として寺澤の名前を挙げている。この記述をふまえると、橘の研究には少なからず寺澤からの影響があると考えることができる。このことは、日本における草創期の「老年学」研究において、寺澤の果たした役割が決して小さいものであったわけではないことを示唆している。

それでは、寺澤が小論を寄稿した大正10年（1921）6月刊行『太陽』（27巻8号、博文館創業第三十四週年記念増刊）「不老長生之研究」という特集はどのようなものであったのだろうか（26）。表1は『太陽』27巻8号の目次にもとづいて作成した掲載論文のタイトルと執筆者の一覧である。

執筆者は総勢93名、うち医学博士が23名、文学博士2名、理学博士1名、研究者のみならず一般の寄稿者（婦人長寿者の経験談など）もある。「余の実験せる健康法」と題された箇所には44名の健康実践が掲載されており、このなかには澤柳政太郎（教育者、東北帝国大学初代総長）、金子堅太郎（政治家・官僚）、南方熊楠（民俗学者）、井上通泰（歌人・国文学者）、犬養毅（政治家）、下田歌子（教育者・歌人）など、当時の著名人が名を連ねている。内容は、医学の分野の執筆者が多いことからわかるように、医学的な見地から寿命の問題、健康、栄養などを扱ったもの、健康長寿の具体的な方法と実践が中心となっている。以上のような特集号のなかに、「老年学」と題された寺澤の論考が掲載されているのである。

それでは次に、寺澤の「老年学」という論考の構成を確認しておきたい。寺澤の論考は以下の10節から構成されている（27）。

- 一 老者に新しき生命を注ぐ法
- 二 老年の年齢及び現象
- 三 老年期の解剖生理学
- 四 老年心理学（上）
- 五 老年心理学（下）
- 六 老年の業績
- 七 老衰の原因及び予防
- 八 心身の練習及び疲労
- 九 老衰に対する精神の影響
- 十 老年病学

表1 『太陽』第27巻第8号 不老長生之研究 掲載論考一覧 目次

タイトル	肩書き	執筆者
生命問題の核心	医学博士	永井 潜
寿命の問題	文学博士 医学博士	富士川 游
スタイナハの若返り法	医学博士	永井 潜
職業と寿命	法学博士	栗津 清亮
不可能なるスタイナハの若返り法	医学博士	林 春雄
生命保全の道	医学博士	綿引 朝光
老人性変化の病理	医学博士	角田 隆
長命の話	ドクトル	三田谷 啓
人寿を短縮する細菌寄生蟲	医学博士	宮入 慶之助
性の問題と早老不老	医学博士	羽太 鋭治
如何に天寿を全うすべきか	医学博士	近藤 乾郎
寧丸エキスの効力	医学博士	阪口 勇
精神的方面よりの不老長寿法	医学博士	三宅 鑛一
睡眠と疲労回復	医学博士	加藤 元一
肺の治療と不老長生	医学博士	浅原 慎次郎
細菌寄生蟲と老衰及人壽	医学博士	藤波 鑑
禪門と不老長生觀	曹洞宗大学教授	忽滑谷 快天
老衰者若返りの実験	医学博士	榊 保三郎
仙人生活	文学博士	高瀬 武次郎
不老長生と息災延命	医学博士	高野 六郎
積極的樂觀的健康法		永井 道明
努力主義の遅老長生法	東京市技師	吉田 章信
余の実験せる健康法		四十余名名士
心理学上の不老長寿論	文学士	上野 陽一
少食菜食と無病長寿	医学博士	二木 謙三
健康長生と營養の關係	医学博士	澤村 眞
高齢者の統計的觀察	国勢院統計官	濱田 富吉
近時流行各種藥物の効力	医学博士	中原 徳太郎
齒は齒なり	ドクトル	奥村 鶴吉
老年学	文学士 医学士	寺澤 嚴男
老衰予防としての營養学	医学博士	佐々 廉平
性慾と長寿との關係	医学士	藤井 貞
平凡なる健康長寿の諸条件	医学博士	額田 豊
余は如何にして長寿を保てるや		
余の今日迄の健康法	子爵	澁澤 榮一
古武士を龜鑑にする余の養生法	子爵	石黒 忠恵
余の八十年來の健康維持法	男爵	大倉 喜八郎
八十九歳でも達者な自分		矢島 揖子
高齢者としての余の生活		内藤 鳴雪
雪嶺翁の平生	雪嶺夫人	三宅 花圃
家庭に於ける原首相の生活		一記者
植物の寿命について	理学博士	伊藤 篤太郎
疾病の社会に及ぼす影響	医学博士	三田 定則
体育的強健法の研究		
岡田式静座法とその効果	マスターオブアーツ	岸本 能武太
不老養生法としての自強術		十文字 大元
銀月式強健法		伊藤 銀月
不老長生に関する伝説		遠藤 舟溪
婦人長寿者の経験談		
文化文政の時代を知る媼	百九歳	高見 なか
櫻田事変を娘時分に	百歳	北村 テル
九十六年几帳面の生活	九十六歳	夏目 千代
出京々々上野の戦争を見物した	九十六歳	小林 ツル

※『太陽』27巻8号の目次より作成

それでは、寺澤の論考の内容を追いかけていくことにしたい。まず「一 老者に新しき生命を注ぐ法」においては、以下の文章から書きはじめられている。

不孝にして夭死した者の外、凡ての者が必然到着すべき道免る可からざる運命は、老年である。自然に放置するも伸びずんば已まざる児童期青年期に比して、一層の警戒注意を要するは老年期である。陰惨なる影を宿し、死の予感を深うせしむる老年期をして幸福、安慰の天地たらしむべき科学的研究は、既に児童期及び青年期を経過し去りたる我等に取つては唯一最大の要求である。個人の発達をして、出来得る限り偉大に、出来得る限り速かならしめんとする児童期及び青年期に於ける教育的努力も、勿論重要なものには相違ないが、之と共に折角偉大なる発達を遂げ得たる個人の能力を出来得る限り長く保持し、出来得る限り永く社会に奉仕せしめんとする国家の人物経済上より云ふも非常に重要な施設と云はなければならぬ。社会より老衰沈滞の雰囲気を一掃し去りて、清新旺盛の気を溢らしめんが為めには、高齢者を速かに死滅せしむるの道を取るべきにあらずして、常に彼等の新しき生命を注ぐの法を取るべきである。(28)

ここにみられるように、寺澤は青年期に比して暗く死をイメージさせる「老年期」を幸福かつ安らかにさせる科学的研究の必要性を説き、さらに青年期までに発達・獲得した能力の維持とそれをもとにした社会への奉仕を持続させることの重要性を主張する。老いにまわりつくマイナスのイメージ（「老衰沈滞」）を一掃し、老いや老人を新たに捉え直そうとするのである。

このように現在取り組むべき課題を設定したうえで、寺澤は「二 老年の年齢及び現象」において、老年がいつからはじまるのかについて言及し、「老年学」の定義を与えている。まず、老年がいつからはじまるのかについては、以下のように述べられている。

老年は何歳頃から始まるかは、学者に依つて其説が區々であるが、元来かう云ふ事は、さう確かに云へる事ではなからうと思ふ。少しにても身体の或器官又は或機能に老衰退化の徴候が現れ始める頃からを老年期と云ふべきか、或は老衰の徴候が相当に顕著になつて普通に老人として認めらるべき時期になつてから云ふべきかに依つて、余程違つてくる。第一の標準に依つて云へば、既に四十歳以前の頃から老年期に入るものと云はなければならぬ。第二の標準から云へば、先づ六十歳前後から老年期に入るものと云つてよいやうである。(29)

寺澤は、身体の器官や機能に老衰の傾向が現れる段階と老衰の傾向が顕著になる段階とで、老年となる年齢が異なるとし、前者であれば40歳以前から、後者であれば60歳前後が老年と捉えられると述べている。老年といわれる年齢をどのように捉えるのかについては、古くは律令の規定にみられるものであり、ここで述べられている寺澤の見解はさほど目新しい捉え方というわけではない(30)。むしろ注目すべきは、寺澤は「老年」と「老人」の語を区別して、「老年」という語は「例へば五十歳以後を呼ぶと云ふ風に、人為的に何処に区画を置いて定めてもよい」とし、「老人」と

いう語は「暦の上での年齢に依つて定め得可きではなく、心身の上に見れたる事実上の事を云ふ」と規定していることである。すなわち、「老年」とは、どのような基準を設けるかはともかく年齢で区切ることができる概念であり、「老人」とは年齢で規定することはできず、心身に生じる現象で決められる概念ということである。この使い分けが意味をもつのは、「老年学」とは年齢上で区切られる「老年」を対象とする学問となるからである。以上の「老年」「老人」の使い分け、老年期の捉え方をもとに、寺澤は「老年学」について以下のように定義している。

老年学と云ふのは、老年期に於ける身体的及び精神的現象及び老年期における病的現象を講究し、更に遡つて其原因を闡明し、以て心身の老衰を豫防し、其活動能率を高め、其疾患を予防治療するのにある。(31)

ここにみられる「老年学」の定義とは、およそ次の3つにまとめられるだろう。

- ①老年期の身体・精神の現象と病的現象の考究
- ②①の原因の解明
- ③老衰・病気の予防

以上の①～③に沿って、寺澤は論述を展開していく。「三 老年期の解剖生理学」では、老衰の徴候が現れる身体器官について述べ、「此の方面の研究は、老年学の基礎として極めて重要な部分」と捉えている。解剖生理学は上述の①の老年期の身体現象の考究に関わる学問として位置づけられているということができる。

「四 老年心理学(上)」と「五 老年心理学(下)」とにおいては、「精神の老衰現象」について論述されている。「精神の老衰現象」の考究には、二つの方法があるとし、一つは「児童、青年、成人等の精神作用と比較して、老年者の精神作用を観察実験する事」であり、もう一つは「精神病理的方面からの研究」である。老年者の心理を探る「老年心理学」と精神疾患の1つとして分類される「老耄性痴呆」の研究の必要性が述べられているのである(32)。老年心理学のカバーする領域は、上記①のうち、老年期の精神現象の考究ということになるだろう。

「六 老年の業績」では、「老年の心理的研究に、猶他の一つの重要な方法がある」とし、「古来高齢にして種々の偉大な業績を貽した人々に就ての研究である」と述べ、老年の心理学研究の一環として、高齢で偉大な業績を残した過去の人物の研究を行うことの必要性を主張している。過去の人物の研究を行うということは、歴史学のカバーする領域と云うのが、寺澤は歴史的な素材を活用することについて、以下のように述べている。

歴史的の記載は、科学の研究対象としては往々不正確なることを免れぬ。然れども彼等が自ら手を下して為した文学上或は科学上の著作、或は書字の筆蹟、若しくは絵画彫刻等の実物に就て、其当時に於ける彼等の思想或は意志動作を研究する事は、非常に興味あり且つ有益なるものと云はなければならぬ。……此研究の目的の一つは、之等の人々が青年時代より中年時代を通じて晩年に至るに従つて、其作物の上に如何なる変化を現して居るかを精細に追跡して、年齢の経過に伴ふ精神作用の変遷を知るのにあるが、他の重要なる猶一つの目的は、偉大なる人々が老齢に至る迄、其知能感情等が、如何に旺盛に如何に若々しきかを知らんとするにある。(33)

先述したように、あくまで「老年の心理的研究」の枠組みが前提にされてはいるものの、歴史上の人物や絵画・彫刻を対象として、「思想や意志動作」を研究するという内容は、人文学の分野に通ずる内容を有しているといえる。寺澤の構想する「老年学」においては、人文学の領域に属する研究対象も排除されることなく、「老年の心理的研究」の一環として、人文学研究に通ずる要素が組みこまれていたことは注意する必要があるだろう。つまり、「老年学」研究の草創期においては、人文学研究のもつ意味が認識され、「老年学」研究の全体像のなかに位置づけられていたのである。

以上が上述した①老年期の身体・精神の現象と病的現象の考究に関わる内容であるが、それをカバーする学問としては、解剖生理学、老年心理学と「老耄性痴呆」の研究、さらには歴史上の人物や絵画・彫刻を素材とした歴史的研究が想定されていたのである。

「七 老衰の原因及び予防」では、「老衰の原因論及び予防論」が述べられている。これは、上述の②および③に関わる内容である。老衰の原因として、寺澤は「老衰の原因を明らかにせんが為には、先づ個々の細胞の老衰の原因を明らかにせねばならぬ」と述べ、細胞のレベルでの考察を主張する。「八 心身の練習及び疲労」では身体的レベルでの老衰の予防、「九 老衰に対する精神の影響」では精神的レベルでの老衰の予防についての見解が述べられ、最終節の「十 老年病学」では、老年特有の病気に関する議論にふれ、「医学の中に小児科あり婦人科ある以上、それと同一の理由の下に老年病学なるものが特別に存在せなければならぬ」と主張されている(34)。

以上、寺澤の「老年学」について概観してきた。寺澤の構想は、およそ以下のようにまとめられるだろう。

- ①老年期の身体・精神の現象と病的現象の考究……老年期の解剖生理学、老年心理学（+歴史・文学、美術などの人文学の要素）
- ②①の原因の解明……細胞の老衰の考察、心身の練習と疲労の研究
- ③老衰・病気の予防……適切な心身の練習、老年病学

このような寺澤の構想をみると、ここには解剖生理学、医学、生物学などの自然科学系の学問、

心理学や歴史学・文学などの社会科学・人文学系の学問が織り成され「老年学」という学問が捉えられていたことがわかる。さらに、「老年学」の論考の末尾で、寺澤は次のように述べている。

以上は唯老年学と云ふものを建設するならば、其中に於て取り扱はねばならぬと思はるる項目を挙げて、繁簡極めて不揃ひながら、其各項目に就いて其大体を説明した迄のものに過ぎぬ。
(35)

「老年学」という学問を「建設」するために必要であると考えられる要素について、寺澤がこの論考で述べているということがわかる。前節で検討した大正年間に公刊された入澤達吉・安藤重治郎・村松平次郎『老人病学』、穂積陳重『隠居論』、松本亦太郎の『智能心理学』と比較すると、これらの研究とは異なり、寺澤の「老年学」という論考は小論ではありながらも「老年学」という学問を構築するという意識のもとで書かれており、日本における「老年学」という学問のはじまりを考えるうえでは見逃すことのできない主張であるということができのではないだろうか。さらに注目すべきは、寺澤の「老年学」という学問の構想は、歴史上の人物や絵画・彫刻を対象として、「思想や意志動作」を研究するという内容は、人文学の分野に通ずる内容を有していたという点である。

「老年学」研究のなかに人文学研究がカバーする領域を位置づけるという意識は、寺澤のみならず、寺澤に指導を仰いだと述懐している橘覚勝にもみられる。橘は昭和16年（1941）に『老年期』という著作を刊行しているが、その書のなかでは老人観の歴史の変遷、辞世の句を素材とした老年期の人生観、敬老の精神の歴史的探究など、人文学研究の観点からの検討を行っている（36）。この書の内容のもととなった仕事は、橘が浴風園において研究を行っていたときからのものである。橘は『浴風園調査研究紀要』第4輯に寄稿した「我国に於ける養老思想及養老事業の史的考察」（この論文は、『老年期』第6章「敬老思想と日本精神」と通ずるところがある）の末尾において、以下のよう

終わりに、あらためて、資料蒐集に際し、御原誼を賜ふた辻善之助博士、山本信哉博士に深謝の意を表する次第である。（37）

橘が資料蒐集をするにあたり協力した人物として、辻善之助（明治10年・1877～昭和30年・1955）と山本信哉（明治6年・1873～昭和19年・1944）が挙げられている。辻善之助は歴史学を専門とし日本の仏教史に関する研究の第一人者であり、山本信哉は神道史研究の第一人者である。そして、辻、山本はいずれも東京帝国大学史料編纂所につとめており、橘の研究に必要な資料を紹介できる能力と社会的地位を有していたのである。橘の老年学研究もまた人文学の研究を排除するものではなく、むしろ積極的にその成果を取り入れ、当時の第一線の研究者と交流しながら研究を深

化させていたのである。こうした橘の老年学研究の先駆的な存在として、寺澤の「老年学」構想があったと位置づけることができるのでないだろうか。

結びにかえて

本稿では、これまでの「老年学」研究のあり方を再考する一環として、日本における「老年学」研究の草創期について検討してきた。日本における「老年学」研究の草創期の研究としては、戦前に刊行された入澤達吉・安藤重治郎・村松平次郎『老人病学』、穂積陳重『隠居論』、松本亦太郎の『智能心理学』が注目されてきた。しかし、これらの研究は、それぞれ医学、法制、心理学という研究分野からの「老年」「老い」に関するものであり、「老年学」研究につながる要素はあるものの、「老年学」という学問の全体像を構想するという意識はみられなかった。これらの研究に対して、大正10年(1921)6月刊行『太陽』(27巻8号、博文館創業第三十四週年記念増刊)「不老長生之研究」という特集に掲載された寺澤巖男の「老年学」と題された論考は、「老年学」という学問を「建設」することを意図して書かれたものである点において、日本における「老年学」研究のあり方を考えるうえでは重要な位置を占めるといえるだろう。

寺澤の論考で注目すべきは、「老年学」という学問を「建設」することを意図して書かれたという点のみではない。寺澤の「老年学」構想のなかには、歴史上の人物や絵画・彫刻を対象として、「思想や意志動作」を研究するという人文学の分野に通ずる内容が組みこまれていた点にも注目する必要がある。日本において「老年学」研究が立ち上げられていくときに、人文学研究は排除されることなく、その全体的な構想のなかに位置づけられていたのである(38)。こうした姿勢は、老年心理学のパイオニアと称され、また寺澤とも交流のあった橘覚勝にも受け継がれており、戦前期の日本における「老年学」研究においては、人文学研究の果たすべき役割が与えられていたのである。

それでは、こうした「老年学」研究が変質していく、換言すればいかなる過程を経て、「老年学」研究の枠組みから人文学の研究が見失われていったのであろうか(39)。この点を解明するには、橘が指摘する戦後になって開通した「老年研究そして老年学の提唱のあたらしい幹線」-1950年前後以降の「老年学」研究の展開を検討する必要がある。この点については、稿をあらためて検討することを期して擱筆することとしたい。

註

(1) 内閣府「平成28年版高齢社会白書(全体版)」

http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2016/zenbun/pdf/1s1s_1.pdf (2016年12月23日閲覧)

- (2) 折茂肇編集代表『新老年学』東京大学出版会、1992年。
- (3) 独立行政法人日本学術振興会「平成26年度科学研究費助成事業 科研費 公募要領」、2013年9月1日。
- (4) ちなみに、『新老年学』第2版（折茂肇編集代表、東京大学出版会、1999年）の序では「老年学とは老年者の疾患等を研究対象とする老年医学、老年歯科学、老年者の社会的問題を研究対象とする社会老年学、および老化の機序等を研究対象とする基礎老化学を四つの柱とする総合人間学ともいべき学問である」と「老年歯科学」が加えられて、「老年学」研究が4つの柱から構成されると述べられている。さらに、『新老年学』第3版（大内尉義・秋山弘子編集代表、東京大学出版会、2010年）においては「今回の改訂に当たっては、このような本書の特徴（本村注…標準的な老年学の教科書）をさらに強化するために、この11年にわたる老年学の進歩を大幅に取り入れた。具体的には、「老化の生物学」、「老年医学」、「社会老年学」の3部構成であったものに「高齢者支援機器・技術」を加えて4部構成とした。これは最近の高齢者に対する工学からのアプローチ、いわゆる gerontechnology の著しい進歩に鑑みたものである」というように、書の構成を従来の3部構成（「老化の生物学」、「老年医学」、「社会老年学」）に「高齢者支援機器・技術」を加えて、4部構成にするという改訂をしたと述べられている。現在では、基礎老化学、老年医学、社会老年学に加え、工学を中心としたケアに関する機器や技術に関する研究が重要視されるに至っているということも注目すべき点であると筆者は考えている。
- (5) 柴田博・長田久雄・杉澤秀博編『老年学要論－老いを理解する－』2頁～3頁、建帛社、2007年。
- (6) たとえば、1987年11月に開催された比較家族史学会では「〈古い〉の比較家族史」というテーマでシンポジウムが行われ、その成果は利谷信義・大藤修・清水浩昭編『シリーズ家族史5 古いの比較家族史』（三省堂、1990年）にまとめられている。本書は、主に歴史学の研究者を中心に、法学や社会学などの研究者も参画した共同研究である。本書の巻末には「老いと家族」に関する文献目録が収載されており、これを一覧すれば「古い」「老人」に関する人文学の分野からの研究が少なからず存在することがわかる。同書が刊行された前年には、新村拓氏の「老いと看取りの社会史」（法政大学出版局、1991年）が刊行され、翌1992年には同氏の『ホスピスと老人介護の歴史』（法政大学出版局）も刊行されている。以降、歴史学の分野では「古い」や高齢者をめぐる研究が進展していく。日本文学の分野においても、1989年に『国文学解釈と鑑賞』54-4において「近代文学に描かれた〈古い〉」という特集が生まれ、児童文学では『日本児童文学』42-4（1996年）において「児童文学に描かれた〈古い〉」という特集が組まれている。また、日本倫理学会では第58回大会（2007年）に共通課題として「古い」というテーマが設定され、その成果は『倫理学年報』57（2008年）に掲載

されている。

以上、歴史学、文学、倫理学という人文学研究の限られた分野かつごく一部の研究成果を垣間見たにすぎないが、人文学の分野からも少なからず研究成果が発表されていることは首肯されるであろう。なお、筆者も「老い」について思想史的にアプローチする一環として、林羅山の「老い」の観念について検討したことがある（拙稿「林羅山の死別体験」、東北大学日本思想史研究室ほか編『カミと人と死者』、岩田書院、2015年）。

- (7) 橘覚勝は、東京帝国大学で後述する松本亦太郎に心理学を学び、昭和3年(1928)からは浴風園において高齢者の研究に従事し、戦後、昭和23年(1948)に大阪大学法文学部助教授に着任し、老年心理学の研究・教育にあたった。1950年代、老年学会の設立に寄与し、日本における老年心理学、老年学のパイオニアと評される人物である。橘の老年学に関する先行研究としては、伊東真理子「老年心理学者・橘覚勝再考－その生涯と学説－」（『同朋大学論叢』76、1997年）、中西紀夫・久保田治助「総力戦体制期における橘覚勝の高齢者像－高齢者教育論の展開として－」（『四日市大学環境情報論集』9-1、2005年）、中川威・山本浩市・権藤恭之・佐藤眞一「老年心理学の先駆者：橘覚勝の足跡」（『生老病死の行動科学』17・18、2014年）がある。
- (8) 橘覚勝『老年学－その問題と考察－』61頁～62頁（誠信書房、1971年）
- (9) 『老人病学』序、「著者共識」、大正元年・1912（南江堂書店、1912年）
- (10) 『老人病学』序、入澤達吉、大正10年・1921（南江堂書店、1921年）
- (11) 穂積陳重『隠居論』緒言（哲学書院、1891年）。
- (12) 大正4年(1915)に刊行された穂積の『隠居論』の自序には、以下のように述べられている。
 維新以還、文物制度、驟に其面目を改め、古例舊慣の廃絶に帰したるもの頗る多く、隠居の制の如きも著しく其舊態を改め、学者政事家にして往々隠居の弊害を論じて廢隠居論を唱ふる者あるに至れり。著者当時以為らく、今にして隠居制法の輯録を行ひ、是れが沿革を探究せざれば、遺篇往々散佚し、後来遂に断簡零墨に依りて、僅に其豹斑を窺ふの悔あるに至らむと。是れ著者が敢て自ら揣らずして此制度の研究を思ひ立ちたる所以なり。斯くて著者は聊か之が為めに微力を致し、数年を費して明治二十四年に至り、辛うじて「隠居論」なる一小冊子を公にすることを得たり。（穂積陳重『隠居論』、有斐閣書房、1915年）
- (13) 東京大学百年史編集委員会編『東京大学百年史』部局史一・822頁～823頁（東京大学出版会、1986年）。
- (14) 『朝日新聞』（大正14年・1925）。
- (15) 『智能心理学』427頁～428頁（改造社、1925年）
- (16) 同上・目次
- (17) 同上・427頁～438頁。

- (18) 『智能心理学』438頁～455頁。
- (19) 同上・455頁～464頁。
- (20) 同上・464頁～466頁。
- (21) 註(8) 前掲書・64頁。
- (22) 同上。
- (23) 第1回ジェロントロジー学会について、『朝日新聞』(昭和31年・1956)では「盛会だった初の「老年学会」—「幸福な長寿」の理想実現へ—」という見出しで報じているが、「ジェロントロジーというのは老年学のことである。老年学とはいったい何なのか。老年学会とは一向にききなれぬ会名だ。それはどんなものか……というところで、物語をはじめよう」と報じられている。このことから当時において「老年学」「老年学会」という名称が必ずしも一般的になじみのある名称ではなかったことがわかる。
- (24) 寺澤巖男の生涯については、前川峯雄「学校体育に寄与した人(七)—寺澤巖男—」(『学校体育』3-5、1950年)参照。
- (25) 註(8) 前掲書・62頁。なお、松本亦太郎も「私は明治四十一年頃から老人の心理即精神の衰頹の状を研究するの必要を説き、老人の意志動作及高年者の精神的産物につき考察を遂げつつあった。其後になり寺澤巖男氏は此方面の研究に着手し、最近になり久保良英氏、高良富子氏は諸種の心的機能につき老年期の精神的機能を検査的に研究した」(「日本に於ける心理学の発達」、岩波茂雄編『岩波講座教育科学』第一冊、岩波書店、1931年)と、寺澤が老人・老年期の研究に従事していたことを述べている。
- (26) この特集号について、前号に掲載された予告には以下のように記されている。
- 誰しも長生は願はぬものはないが、現代文明の余弊として心身の過度の労費は自ら人をして病弱短命に終らしめる。しかも、この激甚な生存競争場裡に立つて活動せねばならぬ現代人は、いかにかして精力を増大さし、活力を充満させて各自の天職を全うする丈の生を保存せねばならぬ。茲に於てか、古来の伝説として取り扱はれた不老長生法は、厳密な科学的研究を重ねて、今日の最も進歩したる医学上の重大問題となつてゐる。現代の『生』の問題の基調は、実に根本を茲に置いてゐると云つてもよい。本誌が増刊としてこの研究の一切を網羅して提供する所以も亦茲にある。乞ふ刮目して発行の日を待たれよ。(『太陽』第27巻第7号、大正10年〈1921〉5月)
- 現代文明の弊害として、心身の過度の疲労によって、人々は病弱になり短命になっている。こうした状況において、いかに生命力を増大させていくかについて、古くからの伝説であった「不老長生」の方法が「科学的研究」を積み重ねることで重要なトピックとなっており、そうした根本的な「生」の問題を特集するというのである。
- (27) 寺澤巖男「老年学」(『太陽』27巻8号、1921年)。

- (28) 寺澤巖男「老年学」(『太陽』27巻8号、1921年)。なお、大正9年(1920)の日本の老人人口5.3% (註(6)前掲『老いの比較家族史』27頁)、平均余命は、男42.06、女43.20(大正10年～14年)である(厚生労働省「第21回完全生命表」、平成22年、http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/life/21th/dl/21th_02.pdf、2016年9月8日閲覧)。
- (29) 寺澤巖男「老年学」(『太陽』27巻8号、1921年)。
- (30) 新村拓『老いと看取りの社会史』6頁～13頁(法政大学出版局、1991年)、拙著『いまを生きる江戸思想－十七世紀における仏教批判と死生観－』262頁～266頁(ペリかん社、2016年)参照。
- (31) 寺澤巖男「老年学」(『太陽』27巻8号、1921年)
- (32) 同上。なお、「老耄性痴呆」が他の精神疾患と区別され、独立した概念として通用しはじめるのは、1930年代頃という指摘がある(関口ゆかり「戦前日本社会における〈痴呆〉概念の分析－「老い」の表象分析へむけて－」(『ソシオロギス』33、2009年)
- (33) 寺澤巖男「老年学」(『太陽』27巻8号、1921年)
- (34) 同上。
- (35) 同上。
- (36) 『老年期』(弘文堂書房、1941年)。
- (37) 『浴風園調査研究紀要』第4輯(財団法人浴風会、1932年)
- (38) この点については、寺澤の論考のみならず、寺澤の学んだ京都帝国大学の心理学講座およびそれに関係する研究者とのつながりや研究環境をふまえて、「老年学」が注目されていく背景を検討する必要がある。さらに、先に検討した入澤達吉・安藤重治郎・村松平次郎『老人病学』、穂積陳重『隠居論』、松本亦太郎の『智能心理学』を含めて、大正期に「老年」「老人」にスポットがあてられていく思想的・社会的状況も考察する必要があるであろう。この点については、後考に期したい。
- (39) 天田城介氏によれば、戦後における「老い」に関わる研究は、①人口学からの研究からスタートし、そこに「老年学の知見もふまえた」研究が含められ、②1950年代に制度論的視点からの家族研究、社会保障論や高齢者福祉論、③1960年代以降の社会学の研究へと進展していくと指摘されている(「〈老い〉の倫理学－〈老い〉を現出させる力能から／へ－」、『倫理学年報』57、2008年)。さらに天田氏は、老年医学の領域、1950年代後半からの谷崎潤一郎『鍵』『瘋癲老人日記』をはじめとした老人文学の登場などに言及し、「ここで私たちが押さえておくべき点は、上記の諸々の言説においてさえも幾つかの論争があり、また異なる立脚点から相反する論点が提示されたのだが、おそらく上記の言説に通底していたのは、「〈老い〉の否定から肯定へ」というテーゼであろう」と述べている。天田氏が指摘する1950年代前後からはじまる「老い」をめぐる研究について、いかなる研究分野が「老い」や「老年学」に注目

し、それと併行して人文学の分野ではどのような研究がなされていたのか、そしてそれらの研究がどのように交錯していたのか（または交錯していなかったのか）という点を今後検討していく必要があると筆者は考えている。

付記

- * 1. 引用資料は、適宜句読点を付した。また、旧字体、合字などは通行の字体に改めたところがある。
- * 2. 本稿は、科研費・基盤研究B「ケアの現場と人文学研究との協働による新たな〈老年学〉の構築」（課題番号26310105）による成果の一部である。